

新緑の時期を過ぎ、梅雨に入ったかと思わせる雨の所為で、手取川の舟宿に三日も降り込められた。

今日は打って変った青空が、ミチの行く手に大きくく広がっている。

空は青く澄み渡っていたが、長雨の名残か、空気はまだ幾分湿り気を含んでいて、右手遠く白山に連なる山塊がうっすらと霞んで見えた。

手取川の水は濁って流れが早く、船頭は船を操るのに苦労をしていた。

舳先の男が流れに逆らって竿を入れ、櫓を漕ぐ男と大きな声を掛け合い舟を進めようとするが、屈強の二人をしても水の勢いに押され中々進まず、大きく弧を描いて舟はやっと対岸に着いた。

昨日までの雨で出来た水溜りが、澄み切った紺碧の空を映して青い。その水溜りを右に左に、ミチはまるでケンケンをするように歩いて歩いた。

ミチの気持ちは弾んでいた。松任が近い。間もなく千代尼が住む町に入る。俳人千代尼の名声は、遙か遠く長門の地にも届いていた。

軽やかで気取りのない句を、ミチはこの上なく愛していた。自身の句と比べる時、ミチはいつも思う。何とたおやかで、

その上しとやかなのだろう。真似ようと思っても、全くミチの対局にあつて真似のしようがないものだった。そのことがよけい千代尼への憧れを強くした。

ふと思ひ出した千代尼の句「木からものこぼるる音や秋の風」の句を胸の中で反芻してみた。

ものこぼるる音って、一体何の音だろう。栗？柿？どんぐり？それとも椎の実かな。句の印象から栗や柿では重量感があり過ぎるので、どんぐりか椎の実かもしれない。

その音にそつと耳を澄ましている、まだ会ったこともない千代尼の姿まで目の前に浮かんで来る。

音の正体を、あえて語らないところがこの句の魅力になっている、とミチは思う。読む人に想像の余地を残した仕掛けを、ミチも楽しんだ。

会つてその正体を確かめようか、どうしようか迷っていた。知らないままのほうがずっと永く句を楽しめるようにも思えるのだが、知りたくもあつた。

兎に角会つて話したいことが胸の中にひしめいている。その所為で息苦しささえ感じるほどだった。

街道の前方に家々の塊が見えて来た。千代尼の家を確認しておかなくてはと思ひ、妙に昂ぶる気持ちをなだめ、向かいから歩いて来る農夫に尋ねた。

すると、全く予期していない返事が返つて来てミチは瞠目した。千代尼はとつと亡くなつていたのだ。

辛うじて気持ちを立て直しはしたが、気付けば農夫は既に一町先を遠ざかっている。お礼を言ったかどうかさえも思い出せないほどミチは混乱していた。

考えもしていなかった出来事が、激しくミチを落胆させたようだ。

思考を失ってぼんやり佇んでいる脇を、何人かの人が、怪訝な表情を投げかけて通りすぎた。

中には「どうかしましたか？」と気遣う人もいたほどだった。

一瞬にして萎えてしまった気持ちを奮い立たせ、歩き出しはしたものの足取りは重かった。

迂闊だった。ずっと憧れを胸の中で温めていただけで、千代尼の年齢を改めて数えなおすこともしなかった。

健在だとしても、おおかた八十歳に近いのではなかったか。長府に居る時も美濃に滞在していた間も、千代尼を話題にしたことはなかった。

もし、傘狂にでも千代尼の話をしていれば、恐らくとつくに千代尼の消息は知れていただろう。

加賀に入ってから、山中でちえやおふで達と過ごす間も、ずっと胸に抱いていた楽しみは、千代尼に会うことだった。

その楽しみが呆気なく消えてしまった。重い足取りを引きずって農夫に教えられた表具屋の前に立った。

迎えたのは六兵衛と名乗る千代尼の養子だった。

六兵衛は、はるか遠く、長門の国から養母千代尼を訪ねて来たミチを歓待した。

戸口で少しだけ千代尼存命の頃の話を書いて引き取るつもりで、一夜の宿りをすすめた。そればかりか、先々を案じて、あれこれと細やかな気遣いをみせた。

翌朝、六兵衛に挨拶をしながら、音の正体を聞いてみようか、と思つた。だけど思いなおしてそれをやめた。謎のままの方が、これからも楽しみが続くように思えたのだ。